2023 年 7 月 19 日資料（ドラフト・引用不可）

親鸞仏教センター主任研究員定例講座（第Ⅰ期）

『歎異抄』思想の解明

第 7 回　『歎異抄』の序（4）―「漢文序」のまとめ

加来　雄之

はじめに

もし『歎異抄』がなかったならば、私たちの親鸞聖人の見方はどのようなものであっただろうか。

「法然聖人にすかされまいらせて念仏して地獄におちたりともさらに後悔すべからず」と語り、「弥陀五劫思惟の願をよくよく案ずれば親鸞一人がためなりけり」と述懐した親鸞聖人に出遇うことはできなかった。

『歎異抄』は、親鸞の言行録として製作されたものでもなく、親鸞思想の入門書として製作されたものでもない。『歎異抄』は、ただみずからが師と仰ぐ親鸞の仰せに正しく出遇うことを課題とした人によって記された。親鸞の仰せに出遇ったという深い意味を「われもひとも」見失っていることを悲しみ歎き、それを同行に伝えることを最後の使命とした面授の弟子（唯円）によって記された。

だかこそ『歎異抄』は、親鸞の「同心の行者」「一室の行者」であろうとする私たちに、親鸞の教えへの向かい方を問い直し、学ぶことの本質を思い出させてくれる。だからこそ『歎異抄』は、現代の私たちにとっても、私たちが親鸞聖人の思想を「よきひとのおおせ」として聞いていこうとするときのかけがえのない指標となる。

本文に入るとはっきりするように、『歎異抄』には、親鸞という人の言葉を通しながら、親鸞という人格や教義への囚われている私たちを、その出会いの初心へと連れ帰る視点が示されている。『歎異抄』は、親鸞の物語を通して、親鸞を生み出し、親鸞がその身を置いた世界に私たちを連れて行くのである。

書き下し	
歎異抄	〔題号〕 『異なりを歎くための抄』
竊かに愚案を廻らして、 粗（ほぼ）、古今を勘うるに、	「歎異」―第一段落　『歎異抄』述作の課題「歎異」 〔歎異するにあったの学び姿勢〕
	私なりにそっと愚かな考えをめぐらして、あらあらと〔親鸞聖人がご在世の〕昔と〔これを書いている〕今とを考え比べてみると、
先師の口伝の真信に異なることを歎き、 後学相続の疑惑有ることを思ふに、	〔「古」に照らした「今」の課題的状況〕
	先〔に生まれた〕師が〔直じきに〕口で伝えくださ

	った真〔実の〕信〔心のあり方〕とは異なっていること〔があること〕を〔悲しみ〕歎き、 〔そのことを〕後に学び受け伝えてゆくものに疑いや惑いが有ることを〔悲しみ〕思うにつけて、
幸ひに有縁の知識に依らずば、 争（いかで）か易行の一門に入ることを得ん哉（や）。 全く自見の覚語を以て、 他力の宗旨を乱ること莫（な）かれ。	〔「今」の課題的状況を解決するための二つの指針〕 幸いにも、〔それぞれの仏道にとって〕縁の有る師や友を依り処にしなければ、どうして〔自力を超えた〕やさしい〔専修念仏の〕行という〔ただ〕一つの〔さとりへの〕門〔である教え〕に入ることができるだろうか〔いやできるはずはない〕。 決して、自分の見解に基づく覚ったような言葉をもって、如来の本願のはたらき（＝他力）という〔真〕宗の本〔旨〕を乱すことがあってはならない。
	「抄」――第二段落　『歎異抄』述作の方法
仍て、故親鸞聖人の御物語の趣き、耳の底に留むる所、聊か之（これ）を注（しる）す。 偏へに同心行者の不審を散ぜんが為なり。 と云々。	だからこそ、今は亡き親鸞聖人のお話されたことの趣旨で〔私が〕耳の底にとどめて〔忘れることがないようにして〕いることを少しばかり書きしるす。 〔それは〕ひたすらに、こころ〔ざし〕を同じくして〔専修念仏を〕行ずる人びとの〔いだいている〕不審〔の雲〕を〔バラバラに〕散らそうとするためである。 と、〔私の題号についての覚え書きには〕云っている。

この『歎異抄』をどのような書物として読むべきなのか、その指針となるために置かれているのが『歎異抄』の巻頭に置かれている漢文で記された一文ではなかったか。この「漢文序」は、『歎異抄』の師訓篇のみの序か、それとも『歎異抄』全体の序か。私たちは、『歎異抄』の漢文序において、題号の「歎異」と「抄」の由来の縁を汲み取ることができ、また必然的にその中に、本文が三部（師訓篇、異義篇、述懐篇）で構成される原質を見いだすことができるのではないか、このような見通しをもって拝読してきたのである。

漢文序の中の「所留耳底」を蓮如書写本では「耳の底に留むるところ」と訓んでいる。無意識のうちに「留まる所」と読んでいた私には『歎異抄』を受動的で消極的なものとしていたのではないかと反省させられた。そのことによって、「漢文序」には、私たちに出遭う宗教問題のすべての本質は、「先師口伝の真信」を見失うことにあることが厳しく問われ確かめられている、それが「歎異抄」という題号であり、漢文序はその課題を普遍的に確かめている。そ

して親鸞聖人との出遇いの深い意味を恢復するための一つの方法が、親鸞聖人の御物語の趣（おもむき）を忘れないことにあることを教えるのである。

この『歎異抄』の巻頭に置かれた文は「序」とは呼ばれていない。けれども、「序」に順ずるものとして受けとめることができるのではないか[1]。

もしこの文が「序」であるならば、私たちが『歎異抄』を読むときにどのように位置づければよいのか。

私たちは、「漢文序」が、題号と同じ漢文体で書かれていること、そして「云々」という言葉で締めくくられているなど形式から、題号を敷衍する文章ではないかと理解した。

一、この漢文序には「歎異抄」という名に託された思想課題が簡潔に整然と記されている。

一、　繰り返すように、『歎異抄』はその名が示すように、親鸞の言行録でも、真宗の教義解説書でもなく、「先師口伝の真信の真信に異なることを歎く」という明確な目的をもって執筆された書である。その「歎異」ということを実現するために、『歎異抄』は、「先師口伝の真信」についての伝承を受けとめ、己証として後学の一人として「疑惑有ること」に深く思いをいたしながら、独善的にではなく、どこまでも「われもひとも」という立場に立って批判する。

一、なぜ『歎異抄』は親鸞の独創的な、例えば「如来二種の回向」や「諸佛称名」などの思想用語を使用しないか。それは「先師口伝の真信」「よき人のおほせをかぶりて信ずる」という課題をこの書の中核に置き、故親鸞聖人の「口伝の真信」を受けとめるために、親鸞が先師である源空聖人の「口伝の真信」をどのように受けとめたかに学ぼうとする書であるからである。

法然―親鸞―唯円たち後学

「漢文序」には、「歎異抄」という漢名の題のもとに記されなくてはならない由来が、漢文のもつ格調の高さと簡明さによって示されている。実は、『歎異抄』という名の由来そのものは、跋(後述・第十九章)において、和文によって、より展開した内容をもって、親しみ易く、しかも情感豊かに述べられている。

『歎異抄』の本文の最後に註された述懐の文を通して『歎異抄』製作の精神に触れてみたい。

---

[1]　古田武彦氏は序の云々が『歎異抄』の古写本にもすべてあるから間違いではない断定し、「仍」以下は白く駢儷体がこわれていることから、この部分は「親鸞聖人御物語」という小冊子があってそこから引用したから「云々」とあるという。それ以外は歎異抄を作るときに挙げた聖人の言葉は「おほせそうらいき」になっている。つまり第三条と第十条は歎異抄をつくるときに付け加えたという。（古田武彦『親鸞　人と思想８』、清水書院、昭和四五年、二〇三～二〇四頁参照）その例として、愚勧住信集述の『私聚百因縁集』の巻頭の文も、本文が和漢混淆文であるにもかかわらず、漢文で書かれ「云云」で終わっている（『大日本仏教全書』一四八巻・一頁）

『歎異抄』〈後述〉	安良岡訳
①右条々は、みなもて信心のことなるよりことおこりさふらうか。 ②故聖人の御ものがたりに〔中略〕	①右に挙げた、一つ一つの箇条は、すべてみな、信心がちがっていることから、問題が起こりますのかなぁ。 ②亡き親鸞聖人のお話では、〔中略〕
③当時の一向専修のひとびとのなかにも、親鸞の御信心にひとつならぬ御ことも さふらうらんとおぼへさふらう。 ④いずれもいずれもくごとにてさふらへども、**かきつけ**さふらうなり。 ⑤露命わづかに枯草〈カレタルクサ〉の身にかかりてさふらうほどにこそ、**あひともなはしめたまふひとびと　御不審をもうけたまはり、聖人のおほせのさふらひしおもむき**をもまふしきかせまひらせさふらへども、閉眼ののちは、さこそしどけなきことどもにてさふらはんずらめと**なげき存じさふらひて**、かくのごとくの義ども おほせられ、あひさふらうひとびとにもいひまよはされなんどせらるることのさふらはんときは、**故聖人の御こころにあひかなひて**御もちゐさふらう御聖教どもを、よくよく御らんさふらうべし。 〔中略〕	③現今の、ひたすらに念仏をとなえる人々の中でも、親鸞聖人の御信心と同一でない御ことも ありましょうと、おのずと思われます。 ④どれもこれも私の申すことは、同じ言葉のくり返しでありますが、ここに書きしるしておく次第であります。 ⑤露のようにはかない命が、枯草のように老い衰えた身にふりかかって、命がわずかに存しています間には、行動を共になされる方々のご疑問をも謹んでお伺いし、親鸞聖人のお言葉のございました趣旨をも申し上げてお聞かせ致しますけれども、私が目を閉じて世を去った後では、さぞかし、いいかげんでしまりのない事が多いことでありましょうと歎かわしく存じておりますので、上に上げました、このような異義の数々を論争なされる人々によって、言葉で混乱させられたりなどせられますならば、その時は、亡き親鸞聖人の御心によく適合して、皆さんがいまお使いになります聖教類を、よく念をいれて御覧になるがよいのです。〔中略〕

①まことにわれもひともそらごとをのみまふしあひさふらふなかに、ひとついたましきことのさふらうなり。 ②そのゆへは、念仏まふすについて、信心のおもむきをもたがひに問答し、ひとにもいひきかするとき、ひとのくちをふさぎ、相論をたゝんがために、またくおほせにてなきことをも、おほせとのみまふすこと、あさましく、なげき存じさふらうなり。	①本当に、わたしも他の人も虚しい言葉ばかりをいいあっておりますが、そのなかに、一つとりわけ心の痛むことがあります。 ②そのわけは、念仏もうすことについて、信心の趣きを、お互いに問答し、（また）他の人に言い聞かせるとき、相手の（見解を語る）口を塞ぎ、互いに論じることをやめさせるために、まった仰せでもないことを、仰せであるとだけもうすことは、情けなく、歎いております。

③このむねをよくよくおもひとき、こゝろえらるべきことにさふらう。 ④これさらにわたくしのことばにあらずといへども、経釈のゆくぢもしらず、法文の浅深をこころえわけたることもさふらはねば、さだめておかしきことにてこそさふらはめども、古親鸞のおほせごとさふらひしおもむき、百分が一（ひとつ）、かたはしばかりをも、おもひいでまいらせて、かきつけさふらうなり。 ⑤ かなしきかなや、さひはひに念仏しながら、直に報土にむまれずして、辺地にやどをとらんこと。 ⑥一室の行者のなかに、信心ことなることなからんために、なくなくふでをそめてこれをしるす。 ⑦なづけて『歎異抄』といふべし。 ⑧外見あるべからず。	③この旨を、十分に思い分けて、心得ていただきたいことなのです。 ④これ〔ら〕は決してわたし〔の勝手な〕言葉ではありませんが、経典や祖師たちの解釈の行路（道筋）もしらず、仏法についての文章の浅いさ深いさを心得ているわけでもありませんから、きっとおかしなものになっていることでしょうけれども、古に親鸞が仰せになった言葉の趣旨を、百分の一ほど、ほんのわずかばかりを思い出させていただき、ここに書きつけさせていただいたのです。 ⑤悲しいことではないか、幸いにも、念仏しながら、すぐに〔仏の願いに〕報いた世界へ生まれないで、〔その世界の〕周辺に宿をとるであろうことは。 ⑥一室〔に集う念仏の〕行者の中で、信心が異なることがないように、泣く泣く筆を〔涙に〕染め〔るようにし〕て、これをしるしたのです。 ⑦〔だからこの書は〕名づけて「歎異抄」というべきです。 ⑧〔こころある人以〕外に見せてはいけません。

【『歎異抄』思想の解明――「宗教の言葉」①】

宗教〔的人格〕の言葉の本質とはなにか――「先師口伝」を手がかりに

法然聖人と親鸞聖人との出遇いの原風景

ただ、後世の事は、善き人にも悪しきにも、同じように、生死出ずべきみちをば、ただ一筋に仰せられ候いしをうけ給わりさだめて候いしかば、上人のわたらせ給わんところには、人はいかにも申せ、たとい悪道にわたらせ給うべしと申すとも、世々生々にも迷いければこそありけめ、とまで思いまいらする身なればと、ようように人の申し候いし時も仰せ候いしなり。

（『恵信尼消息』第三通、『聖典』616－7 頁）

「おのおの、とかくはからわせたまうこと、ゆめゆめそうろうべからず。さきにくだしまいらせそうらいし、『唯信鈔』・『**後世物語**』・『自力他力』なんどの文どもにて、御覧そうろうべし。それこそ、この世にとりては、よきひとびとにてもおわします。ま

た、すでに往生をもしておわしますひとびとにてそうらえば、その文どもにかかれてそうろうには、なにごともなにごとも、すぐべくもそうらわず。法然聖人の御おしえを、よくよく御こころえたるひとびとにておわしましそうらいき。さればこそ、往生もめでたくおわしましそうらえ。おおかたは、としごろ念仏もうしあわせたまうひとびとのなかにも、ひとえにわがおもうさまなることをのみ、もうしあわれてそうろうひとびともそうらいき。いまもさこそそうろうらめとおぼえそうろう。」

（『親鸞聖人御消息集（広本）』第二通・『聖典』564 頁

「ちかごろ浄土宗の明師をたずねて、洛陽ひんがしやまのほとりにまします禅坊にまいりてみれば、一京九重の念仏者、五畿七道の後世者たち、おのおのまめやかに、ころもはこころとともにそめ、身は世とともにすてたるよとみゆるひとびとのかぎり、十四五人ばかりならび居て、いかにしてかこのたび往生ののぞみをとぐべきと、これをわれもわれもとおもいおもいにたずねもうししときしも、まいりあいて、さいわいに日ごろの不審ことごとくあきらめたり。そのおもむき、たちどころにしるして、いなかの在家無智のひとびとのためにくだすなり。よくよくこころをしずめて御覧ずべし。」

（『後世物語聞書』『聖典』930 頁）

・「先師口伝」と「故〔親鸞〕聖人の御物語」と「よきひとのおほせ」
・「先師口伝〔之真信〕」＝「よきひとのおほせをかぶりて信じる外に別の子細なきなり」
・「自見の覚語」について
　「覚語」と「覚悟」
　「先師口伝」と「自見の覚語」
　「有縁の知識」と「自見の覚語」
　「自見の覚語」と「故聖人の御物語之趣」
・「こと」について
　「煩悩具足の凡夫火宅無常の世界は、よろづのことみなもてそらごと・たわごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておはしますとことおおせはさふらいひしか。」（後述）
・「こと」＝「言」＝「事」
　そらごと
　たわごと
　まこと
・言葉の「趣（おもむき）」

『歎異抄』漢文序後半部	『歎異抄』〈後述〉より抜粋
歎異抄 **竊廻愚案、粗勘古今、** **歎異先師口伝之真信** **思有後学相続之疑惑** 幸不依有縁知識者 争入易行之一門哉 全以自見之覚語 不乱他力之宗旨 **仍** **故親鸞聖人御物語之趣、** **所留耳底、聊注之。** **偏為散同心行者之不審也**	右条々は、みなもて信心のことなるよりことおこりさふらうか。故聖人の**御ものがたり**に 〔中略〕 当時の一向専修のひとびとのなかにも、親鸞の御信心にひとつならぬ御ことも さふらうらんとおぼへさふらう。 いずれもいずれもくりごとにてさふらへども、**かきつけ**さふらうなり。露命わづかに枯草〈カレタルクサ〉の身にかかりてさふらうほどにこそ、**あひともなはしめたまふひとびと御不審をもうけたまはり**、**聖人のおほせのさふらひしおもむき**をもまふしきかせまひらせさふらへども、閉眼ののちは、さこそしどけなきことどもにてさふらはんずらめと**なげき存じさふらひて**、かくのごとくの義ども おほせられあひさふらうひとびとにもいひまよはされなんどせらるることのさふらはんときは、**故聖人の御こころにあひかなひて**御もちゐさふらう御聖教どもを、よくよく御らんさふらうべし。 〔中略〕
云々	まことにわれもひとも そらごとをのみまふしあひさふらふなかに、ひとついたましきことのさふらうなり。 そのゆへは、念仏まふすについて、信心のおもむきをもたがひに問答し、ひとにもいひきかするとき、ひとのくちをふさぎ、相論をたゝんがために、またくおほせにてなきことをも、おほせとのみまふすこと、あさましく、**なげき存じさふらう**なり。このむねをよくよくおもひとき、こゝろえらるべきことにさふらう。これさらにわたくしのことばにあらずといへども、経釈のゆくぢもしらず、法文の浅深をこころえわけたることもさふらはねば、さだめておかしきことにてこそさふらはめども、古親鸞のおほせごとさふらひしおもむき、百分が一(ひとつ)、かたはしばかりをも、おもひいでまいらせて、かきつけさふらうなり。かなしきかなや、さひはひに念仏しながら、直に報土にむまれずして、辺地にやどをとらんこと。一室の行者のなかに、信心ことなることなからんために、なくなくふでをそめてこれをしるす。なづけて『歎異抄』といふべし。外見あるべからず。